

全能のパラドクス

ガザの壊滅的な状況を人々が見ると、よくこんな質問が浮かぶ：**神が全能なら、なぜこれを許すのか？** これは古くからの悪の問題であり、瓦礫の下に埋もれた子供たちや、名付けられないほどの大きな損失を悼む家族の映像によって一層鋭く突きつけられる。哲学者たちはかつてこの問題を抽象的に表現した：**神は自分自身で持ち上げられないほど重い石を作れるか？** ガザでは、このパラドクスはもはや学問的なものではない。それは生々しい現実だ。神が殺戮を終わらせることができるなら、なぜそうしないのか？

コーランとより広範なアブラハムの伝統は驚くべき答えを提供する：神は自らが啓示した原理に反する形で行動しない。神の力は無限だが、その正義は原則に基づいている。全能の神は、道徳を自分の意志に曲げる暴君ではない。むしろ、神は自らが宣言した正義と慈悲に一致するものだけを望む。これが**全能のパラドクス**だ：神の力は、自らの法を破ることで示されるのではなく、それを守ることで示される。たとえそれが人間の悪を抑制しないままにしてみても。

神の自己制限：一貫性の代償

コーランはこう宣言する：

誰かが魂を殺すなら…それは全人類を殺したも同然である。そして、誰かが一人の魂を救うなら、それは全人類を救ったも同然である。
- アル・マード 5:32

ユダヤ教の伝統はこの考えを **ピクアハ・ネフェシュ**（生命の救済）の教義に反映させ、ほぼすべての他の戒律を凌駕する命を救う義務を強調する。タルムードは **サンヘドリン 90a** でこれをさらに深め、命の保全が神の正義の基盤そのものと結びついていると述べる。イスラムの **スンナ**（神の慣習）とユダヤ教の **ブリット**（契約）は、どちらも神が粗野な力で行動するのではなく、関係性の忠実さに自らを縛る神を描いている。

壊滅的な介入——攻撃者を一掃すること——は、神が支える道徳的秩序そのものを崩壊させるだろう。それは創造者を神が嫌う混沌に変える。代わりに、コーランはこう説明する：

アッラーが人々を互いに抑え合わなかったら、修道院、教会、シナゴグ、モスク、つまりアッラーの名が頻繁に唱えられる場所は破壊されていただろう。
- アル・ハッジ 22:40

神が好む方法は、一方的な殲滅ではなく、媒介された抑制——**一部を他によって抑えること**——である。これがパラドクスが実際に行動する姿だ：全能が自発的に原理に縛られている。

キリスト教の伝統もこの神の一貫性の原則を反映している。ゲッセマネで、イエスは弟子たちを叱責した：

剣を鞘に納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びる。

- マタイ 26:52

原理に縛られた力であり、粗野な復讐ではない。

殉教の慰め：地平線の向こうの地平線

人間が取り返しのつかない損失を見る場所で、コーランは異なる地平線を明らかにする：

アッラーの道で殺された者を死んだと思うな。彼らは主のそばで生き、糧を与えられ、アッラーがその恵みから彼らに与えたものに喜んでいる。

- アーリ・イムラン 3:169-171

これは決まり文句ではなく、終末論的な反抗だ。不当に殺された者は歴史の脚注ではなく、永遠の主演である。彼らの喜びは殺人者への非難であり、彼らの高揚は苦しみの正当化である。

この信念は、メッカで迫害された初期のムスリムから今日のパレスチナ人の **スムード**（不屈の精神）に至るまで、抵抗を支えてきた。ガザでは、数百万人が避難し、飢餓が生存者を追いつめる中、殉教者が主のそばで生きているという確信は逃避ではなく、生き残りの手段だ。それは悲しみを耐久力に、瓦礫を証言の祭壇に変える。

それでも、コーランの約束は人間の痛みを消し去るものではない。家族は泣き、母親は嘆き、父親は子を埋葬する。最初の反応は悲嘆、慟哭、怒り——愛は分離に抵抗するからだ。しかし、パレスチナ人の中では、この悲しみはしばしば別のものに変わる：愛する者がガザの廃墟でのさらなる苦しみから救われたという認識、神の意志の受容、そして来世での再会への忍耐強い希望である。

彼らの信仰は、死を単なる喪失ではなく、解放として再定義する——地上の苦痛からの解放、そして神の慈悲への解放だ。だからこそ、ガザの葬送曲は涙に濡れながらも **アッラーフ・アクバル** の叫び声で響き合う。それは嘆きであり、かつ肯定でもある：殉教者が破壊されたのではなく称えられ、欠席しているのではなく待たれていると信じることを選ぶ人々だ。

これもパラドクスの一部だ：神は殺人を止めるために自らの法を破ることを拒むが、犠牲者を無に棄てることも拒む。

神の道徳的純粋性：償われぬ血の響き

パラドクスのもう一つの側面は神の純粋性だ。殺人を通じて介入することを拒むことで、神は罪の責任を完全に犯人に委ねる。発射されたすべての弾丸、投下されたすべての爆弾、飢えたすべての子——その汚点は彼らにのみ属する。

誰かが一粒の善を行えば、それを見るだろう。そして、誰かが一粒の悪を行えば、それを見るだろう。

- アル・ザルザラ 99:7-8

今日、ガザの土は血で染まり、叫び声は一人の兄弟の声ではなく、何十万もの声だ。**68万人の無垢な血がガザの地から神に向かって叫ぶ——かつてアベルの血が土から天へ叫んだように。**

あなたの兄弟の血の声が地から私に向かって叫んでいる。何をしたのだ？
- 創世記 4:10

審判の日には、体そのものが検察官となり、持ち主を裏切る：

その日、われわれは彼らの口を封じ、彼らの手がわれわれに語り、彼らの足が彼らの稼いだものについて証言する。
- ヤシン 36:65

そして、罪人を待つのは安堵のない苦痛だ：

彼はそれを飲み込むが、ほとんど飲み込めない。死があらゆる方向から彼に迫るが、彼は死なない。そして、その前には巨大な罰がある。
- イブラヒム 14:17

タルムードは疑いを残さない：

悪人は…来るべき世界に分け前がない。
- サンヘドリン 90a

伝統を超えて、判決は一致している：このような大規模な殺戮は、ゲヘナで清められる罪だけでなく、**神の名そのものの冒瀆**だ。それは **ピクアハ・ネフェシュ**——命の救済を優先する戒律——を破り、人間が **ビツェレム・エロヒム**——神の像に創造されたという真理を嘲笑する。それは神の戒律に対する公然の反抗であり、その結果は永遠の排除である。

沈黙の非難：傍観者としての共謀

しかし、パラドクスはさらに広がる：神が自らの法を破ることを拒むことは、世界が試され、傍観者が暴露されることを意味する。聖書は実行者だけでなく、見て何もしない者を非難する：

われわれは確かに地獄のために多くのジンと人間を創造した。彼らには理解しない心、見ない目、聞かない耳がある。彼らは家畜のようだ——いや、それ以上に迷っている。彼らが無関心な者たちだ。
- アル・ア‘ラフ 7:179

これは歴史の「家畜」に対する雷鳴だ——停戦を拒否する政府、「両方の側」を同等に扱うメディア、瓦礫をスクロールする市民。大虐殺の前での中立は共謀だ。

タルムードは言う：**コル・イスラエル・アレビム・ゼー・バゼー**——「すべてのイスラエルは互いに責任を負う。」その精神では、これは普遍的だ：全人類は責任によって結ばれている。沈黙は中立ではない。それは裏切りだ。

ガザにおける全能のパラドクス

ここでパラドクスは鋭くなる：神は全能だが、自らの道徳的法に縛られている。殺人を止めるために殺人はしない。不正を止めるために不正はしない。代わりに、人間の悪が自らを暴露することを許し——そうすることで、最終的な審判のために道徳的純粋性を保つ。

殉教者にとって、これは慰めを意味する：彼らの血は失われず、証言と名誉に変えられる。実行者にとって、それは非難を意味する：彼らの犯罪は彼らに対して叫び、彼ら自身の体が証言し、その運命は永遠の排除だ。傍観者にとって、それは暴露を意味する：彼らの沈黙は共謀であり、彼らの中立は呪いだ。

結論

全能のパラドクスは抽象的な謎ではなく、ガザで生きられた現実だ。それは神の力が恣意的ではなく、原則に基づいていることを示す。神は自制を選び、その自制の中には無垢な者への慰めと有罪な者への非難が共存する。

実行者にとって、彼ら自身の体が彼らに対して証言し、その苦痛は終わりなく、犯罪は土そのものによって響き合う。傍観者にとって、沈黙そのものが呪いだ。殉教者にとって、死の向こうに命があり、悲しみの向こうに喜びがある。

ガザの瓦礫から神の不在の証拠が立ち上がるのではなく、二重の真実が現れる：人間の残酷さが本物であり、神の正義が避けられないということだ。残る問いは、今なお息をしている我々がこのパラドクスを認識し——神が定めた命の法に従って生きるかだ：殺すのではなく、救うこと。